

止まり木



いま、旅立ちのとき



本日の卒業式で、卒業生に贈った式辞を紹介いたします。

式 辞

「必笑(必ず笑う)・楽笑(楽しく笑う)・協力笑(協力し合って互いに笑う)」の学年目標のもと、仲間を思いやりながら、笑顔で三年間を過ごした第四十一期生、八十八名の卒業生のみなさん、卒業おめでとうございます。また保護者、ご家族の皆様、本日は、お子様のご卒業、本当におめでとうございます。教職員を代表して心からお祝いを述べさせていただきます。

今、一人ひとりに卒業証書を授与しました。みなさんとはたった一年の付き合いでしたが、感慨深い気持ちでいっぱいです。思い返せばみなさんは、コロナ禍の影響を最も受けた学年です。怖さや不安、絶望感にさいなまれる日々を過ごしたことと思います。しかし皆さんはそんなハンデをものともせずいろんな場面で私たちに感動を与えてくれました。修学旅行では自分のやるべきことを考えて動く、考動。街中の公の場でも周りのことを考えて動く、公動。と節度ある中で存分に楽しんでいました。体育大会では初めての試みとなった縦割りの団対抗のリーダーとして、本気でやるカッコよさを後輩たちに、その背中を示してくれました。さらに、合唱コンクールでの美しいハーモニー。仲間とともに一つのことを創り上げるすばらしさを示してくれました。そんな中で私が一番印象に残っているのは、みなさんと汗を流した球技大会です。ある日、各クラスの学級委員長が校長室を訪ねてきました。「3年生で球技大会をやるので、校長先生もぜひ参加してもらえませんか」と。12月、鶴見緑地球技場でドッチボールをしましたね。コートに入るとあちらこちらから「校長先生、校長先生」という声が、「狙われている」と危険を感じた私は言いました。「顔に当てたら卒業させないから」と。こんな冗談を言え、それを受け入れてくれるのが皆さんでした。そして、そんなことを言わなくても、私を気遣いながら投げかけてくれていたのが皆さんです。本当に優しい集団でした。そんなことを思い返していると、もっともっと皆さんと横中での生活を過ごしたかったなあと思います。しかし、残念ですがお別れの時です。そして旅立ちの時です。そんな巣立ちゆくみなさんに期待を込めてお話ししたいことがあります。

みなさんは、オートバイや自動車をつくる「ホンダ」という会社を知っていると思います。今は大変大きな会社ですが、会社を興したときは小さな会社でした。まだ、ホンダが小さな、小さな会社だったころ社長の本田宗一郎さんは社員にこう問いかけます。「ブレーキは何のためにあるんだ」と。社員は、皆当たり前のように「止まるためです。」と答えました。そこで本田さんは社員に「夢」を語り始めます。その答えが「ブレーキは速く走るためにあるんだ。ブレーキがあるからこそ、速く走る車をつくることができるんだ。」でした。このような柔軟な発想で性能のいいスピードの速い車の開発にチャレンジしたそうです。本田さんは、「チャレンジして失敗を怖れるよりも、何もしないことを怖れなさい」という言葉を残しています。可能性とは、「未来の能力」のことです。現在の能力で「できる、できない」を判断してしまつては「新しいこと、困難なこと」はいつまでもたってもやり遂げられません。大切なことは、自分の可能性を信じ、「やればできる」と熱く心を燃やし続けることです。体育館前に「叶」の花文字が掲げられています。1年生が、3年生のみなさんと、この春に入学する新入生に贈る言葉として、この字を選び、思いを込めて制作しました。「やればできる」の心で、みなさん一人ひとりの夢や目標が叶うことを願っています。

では、卒業生の皆さん、横堤中学校はこれからも「止まり木のような学校」としてみなさんを見守っています。何かあったらいつでも力を蓄えに来てください。在校生も皆さん同様しっかり足跡を残してくれると信じています。安心していてください。最後に皆さんが、これから始まる新しい世界を威風堂々と歩いていかれることを祈念し、私のお祝いの言葉とさせていただきます。

令和五年三月十四日 大阪市立横堤中学校 校長 田中城明